

教育技能の技術化について



山崎 昌 甫

私は先ず、ソ同盟の若い女教師の手記『四年C組』(三一書房刊)という本の中から幾つかのことばをぬき出して、問題の手がかりをつけることにしよう。

……わたしはこの初めての授業で——わたしは教育大学で講義中にも教授法のなからも教わったことのない、かんたんな、しかも必要欠くべからざる法則を教えてくれた。

正直な話が、いちばん記憶にのこる、いちばんりっぱな教育学の講義をしてくれたのはわたしの生徒たちだった。(八ページ)

……しかし、結局のところ、あなたはぎつとあの手に合う鍵を漁り出されるにちがいない

りません。ねえ、わたしなんぞ、これまで四十年から学校にいます、ぜんぜん、どうにも手の打ちようがないというような例は思いあたりませぬもの。……教育者にとつて、いちばん肝心なこと、いちばん大切なことは——生徒を理解し、衣を脱がせることです。その人間の奥深くひそむ秘密を開いてくれるような機会が、時には思いがけなくやってくる。その瞬間を待ち伏せることです。(三十四ページ)

さて、私たちは以上の引用から、教授法が当然のことながら、児童と教師との教育関係——児童を目的意識的に形成しようとする社会関係——からのみ生まれものである、ということが確認される。すなわち、教育学説や心理学説から導かれた教育方法論が指示するような教授上の学説は実践的な教授における問題の領域の所在を開き、時々、偶発雜起する具体的問題を解決する手段とはならない、ということである。

……いかにいけば「人間の中に奥深くひそむ秘密を開く……」機会をつかむためには、たとえ級方教師のように永い・苦しい努力を続けなければならぬということなのである

勝田守一氏が岩波講座「教育」の中で述べているように、「それは単にある量の知識を手えるためとか、あるいは作文の技術を高めるためのものではない……それは単に教師が表層の子どもの生活を知るために生活記録を導かせるためのものでもない……これは教師にとっては子どもの深層の動機に達する切りこみ口であり、同時に子どもが、そっくり作業を通じて自己と自己の生活を見つめていく過程として貴重な経験を含んでいる」のである。したがって、戦前戦後を通じて、教育が支配者によって形式化され、さらに教育が人民的な目的性を失い、さまよい続けている時、この級方教育は、まじめな、勇をいとうわ教師たちの努力によって、ガリ版ずりの文集となり、彼等の体験記は余閑的に交換され、暗い夜道を照らす「とももしび」ともなるのである。

四十年という長い年月をかけないまでも、すでに彼等の多くは「ぜんぜん、手の打ちようがない」というような例はないほどまでに成長しつつある。

だが、新しい(はじめての)教師にとつては、それはかつて経験したことのない——本でも、誰でも——未知の分野なのだ。すぐれた指導者から、おりにふれ、時にふれて教え導いてもらい、自らもい知れぬ努力をして、独特の境地にまで到達するというようなものである。しかし、それらの教師は多数の中のごく限られた人々によってしか掴みとられていない現状である。

何故か? 私はここで、武谷三男氏の『技術論』の中で述べられている、しき深いことばを契機にこの問題をさらに深く突込んでいくことにしよう。

「……技術と技能とは異なるものであります。之は截然と分離して考える事によつて初めて技術史の発展を正しく把む事が出来、又現在の技術の難点に対処する事も出来るのであります。……技術は客観的なものであるのに対して、技能は主観的・個人的なものであります。……技能は獲得されるものであり、熟練によつて獲得されるものであります。技術は之に反して客観的である故に組織的社会的なものであり、知識の型によつて個

人から個人へと伝承という事が可能なのであります。即ち技術は社会の進歩に伴い伝承化より次第に豊富化されていく事になります。「努力とは技術と技能の統一に於て実現されるものであります。即ち、一定の技術には一定の技能が必然的に存在し、努力を実現する事になります。然し技術の立場というものは常に主観的個人的な技術を、客観的な技術に解消して行く事があります。然し解消される事によつて技能が消失するものであるかというのに決して然らず、新たな技術に新たな技能が要求され、之が再度技術に解消されながら発展していくという弁証法的関係をとりながらあります。而して技能の技術化によって一般に生産力は甚だしき上昇を示し、又生産物の質も向上するのであります。」

今此処で技術・技能・努力を、教育技術・技能・努力と置きかえるならば、我々にとつて右のことばは極めて注目すべきものとなるであろう。戦後教育は日本資本主義の矛盾を集中的に表現した。農山漁村の教師たちと、その矛盾の中であえぎ苦しむながらも、一途の光明を求めようとして努力する子供との間に客観的な地盤を持つている。そして戦前どのだれだれの文集から、戦後どこどの村あるいは町の何々学校、あるいは研究会、又同好会の文集へと発展してきた。そのためである。

教育技能の技術化は、全国的な組織を持つ教師たちの力によつてのみ達成されるであろうし、また、それらの教師と、それに協力する学者によつて生み出されると思うのである。しかもそれは、右に述べたように正しい意味での教育技術化である限り、歴史的・社会的基盤の上で、世界の平和と民族の独立という歴史的課題にこたえうる子供の成形成に役立ち、さらにそれは、プロレタリア教育学を科学として、思弁的なブルジョア教育学から区別する重大意義を持つものとなり得るからである。